

君の本に乾杯。

世の中に下戸の建てたる蔵もなし
井原西鶴「世間胸算用」

今回は、お酒に関する本をご紹介します。
お酒の世界の奥深さをこれらの
本から感じ取って下さい！

そのメロディに魅せられて♪

『手のひらを太陽に』
(「親子で歌いつこう 日本の歌100選」収録)
D4才07309 篠崎ほか所蔵

小学生、初めてこの歌を聞き、生きることへの力強さを感じる歌だと思った。中高生、その前向きさが暑苦しく感じた。現在、自分を励ましたい時に口ずさんでいる。この詞をアンパンマンの作者やなせたかしさんが書いていたと知って、驚くと共に「なるほどね」とうなづけた。「自分の出来る事で少しでもみんなが喜んでくれたらうれしい」と言う様な事を言っていたのを目にした事がある。心根というのはその作品や行動に顕われ、人を勇気付けることが出来るんだなと思った。ご冥福をお祈りします。

お酒って
何だあ??



『こどものための
お酒入門』

山岡 敦子著
イースト・プレス社
J588サ
松江所蔵



タイトルの通り、子ども向けに書かれたお酒の本です。日本酒、ビール、ワインなど様々なお酒を紹介し、その歴史やお酒ができる工程がわかりやすく説明されています。もちろん、大人が読んでも十分楽しめる一冊です。

この本で特におすすめしたいところが、作り手たちの熱い想いです。仕事への想い、愛するお酒への想い、飲んでくれる人たちへの想いなどが強く伝わってきます。お酒にはたくさんの想いが詰まっているのです。そして、この本を読んだあとに飲むお酒は、きっと前より美味しく感じるはずです。(かき氷職人)

『落語に見る
江戸の酒文化』

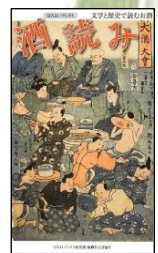
旅の文化研究所編
河出書房新社
383.8工
篠崎ほか所蔵



「長」屋の花見」「もう半分」「のめる」……。これらは酒飲みの描写が登場する落語のほんの一部。人々の暮らしを面白おかしく語る落語には、お酒が登場する話が意外と多いそうです。落語を通して、江戸時代の酒文化を綴った本。

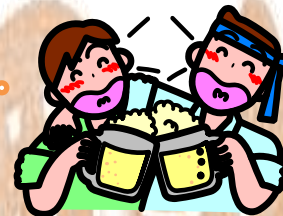
『酒読み—文学と
歴史で読むお酒—』

ほろよいブックス編集部編
社会評論社
383.8サ
篠崎ほか所蔵



「私」は禁酒をしようと思っている。このごろの酒は、ひどく人間を卑屈にするようである。」(太宰治「禁酒の心」)などなど、文学や歴史がいっぱい詰まったお酒の本。液体ではなく、活字で酔い痴れてください。

お酒を飲んだら、
どうなる?



『青いお皿の
特別料理』

川本 三郎著
日本放送出版協会
F力
中央ほか所蔵



「第二」の人生を歩みだした夫婦の居酒屋でのささやかなお祝い、公園で絵を描く老人とのお弁当を通じた交流……。淡々と続く日常の中でふと生じるドラマを、酒や食事をテーマにまとめたオムニバス形式の短編小説集。

私たちが普段何気なく送っている日常生活の中で感じる些細なことを掬い上げた小説。それぞれのお話は独立しながらも、登場人物にはどこかに接点があり、それを探すのも楽しみ方の一つ。食事のシーンの隅でさりりと書かれるお酒の描写に、脇役ながらもしっかりとその存在を感じさせます。お酒も料理も大好きという方におすすめです。(てんてん)

『花の下にて
春死なむ』

北森 鴻著
講談社文庫
BFキ
篠崎ほか所蔵



「ビ」アバー「香菜里屋」のマスターが客の持ってきた謎を解決していく短編ミステリー集。バーで出される度数の違う4種類のビールと料理は本当に美味しそうです。こんなお店があったら是非行ってみたい！

『ひとしずく』
(「みぞれ」所収)

重松 清著
角川文庫
BFシ
篠崎ほか所蔵



「妻」の誕生日を祝うため和夫は高級ワインを購入し、2人でささやかな誕生日パーティをしようします。しかし、そこに義弟と甥っ子が訪ねてきて……。義弟たちの図々しさに怒りを感じますが、最後は妻の優しさが染み渡る作品です。

『小説母里太兵衛』

羽生 道英著
人物文庫
BFハ
篠崎所蔵



「平」成26年の大河ドラマの主人公・黒田官兵衛の重臣・母里太兵衛の一代記。槍術に優れた剛力の勇将で、数多の合戦で先陣を切り武功をあげる。官兵衛・長政の二代に仕え、家臣や領民に愛された太兵衛の活躍を描く。

太兵衛は「フカ」と渾名されるほどの大酒飲みで、飲み比べしたいという者があらわれるほどでした。福島正則邸に使者として赴いた時、大杯に注がれた酒を勧められ、飲む条件として名槍「日本号」を所望。見事飲み干し、槍を持ち帰りました。この逸話から、「黒田節」が生まれました。私は酒を飲むとすぐ真っ赤になるし、あまり飲めないのが太兵衛のように酒を水のごとく飲むのが夢です。(風雲ふわふ丸)

『屋のセント酒』

久住 昌之著
カンゼン
291.3ト
篠崎ほか所蔵



「お」昼から銭湯に入ってさっぱりした後は、美味しいお酒と肴が欲しい！ 東京都内にある銭湯と、その近くにあるお酒の美味しい居酒屋を紹介。またそれぞれの銭湯、居酒屋に訪れる人々の様子を綴ったエッセイ本です。

『酔って記憶を
なくします』

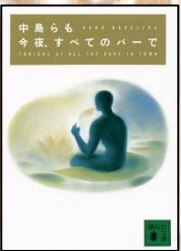
石原 たきび著
新潮文庫
B383ヨ
篠崎ほか所蔵



「交」番のお巡りさんにプロポーズ。「岡山では桃でバスに乗れる」と吹聴。知らない家のソファで発見されるなどなど。全国の酔っぱらいがやらかした爆笑失敗談&武勇伝がてんこ盛り。皆様、お酒はほどほどに。

『今夜、すべての
バーで』

中島 らも著
講談社文庫
BFナ
篠崎ほか所蔵

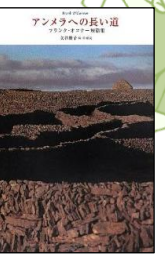


「主」人公の小島容がアルコール中毒で入院してから退院するまでを、おもしろおかしく、そして、ほろ苦く描いた小説。お酒好きにはゾツとする場面が目白押しです。

お酒っていったい何だろう？ 飲酒はけっして悪いことではないのですが、それが度を超すと、途端に人生がガラッと変わり、人生崩壊に至る坂を止まることなく落ち続ける。その怖さがこの小説から感じられます。人によっては、坂の途中で留まることができ、元の道に戻れる人もいますが、そのまま落ち続ける人も……。しかし、お酒って節度を保って飲めば、最高なんですよ。(M.弱尊)

『酔っ払い』
(「アンメラへの長い道」所収)

フランク・オコーナー著
未知谷
933才
篠崎ほか所蔵



「家」族に大迷惑をかける酒飲みが、どうしたらお酒を止めることができるのか。その答えの一つが、この短編にあります。しかし、ちょっと危険なので、お勧めはできません。いや、その前に倫理的にNGなので、別の方法を考えた方がよいでしょうね。

『望郷酒場に行く』

森 まゆみ著
PHP研究所
596.7モ
篠崎所蔵



「東」京にある47都道府県を代表する味の店のイチオシ料理と酒をご紹介します。本書を片手に店を巡って、郷土料理を肴に美味しい地酒を飲みながら、故郷の思い出にふけったり、旅行気分を味わってみてはいかがでしょうか。